

「バスタールド辞書」大江春塘編 二巻二冊

Nieuwe-gedruct bastaardt woorden-boek. Door Ooye Suntoo. Leefarts van den landsheer Nakats, t' Jedo. 1822.

中津藩主奥平昌高の侍医大江春塘がマイエル『語彙宝函』Woordenschat（初版はAmsterdam, 1669）の第一部『外来語』篇をもとに編纂した蘭日辞典。巻頭によせたオランダ語の序文で昌高は、蘭書に親しんでいる自分にとって外来語辞典がいかに必要かを強調し、同じ蘭学に励んでいる二人の家臣のうち、神谷弘孝は先に『蘭語訳撰』を印刷したが、もう一人の大江春塘は大変な苦勞をして『バスタールド辞書』を刊行したこと、また馬場貞由（佐十郎）が校閲を担当したことを述べている。

本書を編纂した中津藩主5代目奥平昌高（1781-1855）は、薩摩藩主・島津重豪の次男として江戸に生まれ。藩校「進修館」を設立して中津に文武両道の教育を奨励し、また自ら率先して蘭学を学んで、シーボルトとも親交を結び、長崎出島のオランダ商館長ズーフからフレデリック・ヘンデリックの蘭名を与えられるほどの蘭学好きの大名となった。

『バスタールド辞書』は御典医だった大江春塘が、オランダのマイエル辞書のなかのバスタード部を日本訳したものです。上・下巻からなっていて、村上医家史料館には下巻のみが保存されていますが、オランダのライデン大学で発見された上巻には、表紙に大江春塘の刊行であることがアルファベットで書かれ、昌高の序文も掲載されていました。

スピノザの友人マイエルが編纂した原書は『外来語』Bastaardt-woorden 『術語』Konst-woorden 『古語』Verouderde woorden の三部仕立てになっており、『外来語』篇はフランス語からの借用語に、『術語』篇はラテン語の専門用語にそれぞれ対応する複数のオランダ語を訳語として掲げ

ている。十九世紀初頭に出島で作成された通詞の単語帳には「discipel, decipel, 弟子、諸事ヲ学フ童、手習子、バスタールト」などどあり、「バスタールト」が外来語の意味で使用されていたことが分かる。ちなみに、この『バスタールド辞書』では「Discipel 弟子 習フ人」となっている。吉宗の時代に、通詞西善三郎がオランダ人から「コンストウワールド」という辞書をかりて三通り写したので、オランダ人がその努力に感服して原書を与えた、という逸話が『蘭学事始』にみえるが、この「コンストウワールド」はメイエルの『語彙宝函』第二篇である可能性が高い。

標題紙には開いた一冊の書物を二人の天使が両側から抱き、空中に浮遊している姿が画かれている。原書は版を重ねているが、管見の限りこのカットは見られない。おそらく、昌高あるいは春塘が他の蘭書から借用したものであろう。それは『西洋雑記』における天使解釈のように、この書物の普及を願ったのことも知れない。昌高自身は、本書を果樹にたとえ、大江春塘の植えたこの庭の大木がつぎつぎに実を付け、その味なる永遠の果実が日本の同胞の食に供せられんことを願いつつ、序文を終えている。